

治水地形分類図（国土地理院）をどう使うか

伊藤久雄（認定NPO法人まちぼっと理事）

台風19号などの夜豪雨災害に関連して、BuzzFeed Japan（バズフィードジャパン、オンラインメディア BuzzFeed の日本版）が国土地理院の地形分類図画紹介している。

BuzzFeed Japan 10月26日

あなたの家の「災害リスク」が一目瞭然？ 国土地理院のサイトが話題に

<https://www.buzzfeed.com/jp/kotahatachi/gsi>

サイト上では、地図に重ねる形で、その土地の「自然地形」「人工地形」を確認でき、クリックすると、どのような災害リスクがあるのかも表示される。避難所や過去の災害が起きたエリア、「自然災害伝承碑」の位置などを確認することもできる。

話題になってるのは、国土地理院の提供している「地理院地図」の「地形分類図」だ。その土地の成り立ちから、「土地が本来持っている自然災害リスク」をワンクリックで確認することができる。

台風が相次ぐなか、「もっと知られても良いと思う」と呼びかけるツイートは2万以上リツイートされた。

国土地理院によると、東日本大震災では、かつて川や沼だった場所で「集中的に液状化現象」が生じた。こうしたことを受け、誰でも使える形で2016年から提供が始まったという。

サイト上では、地図に重ねる形で、その土地の「自然地形」「人工地形」を確認でき、クリックすると、どのような災害リスクがあるのかも表示される。

たとえば、「旧河道」はこのように解説されている。

かつて河川の流路だった場所で、周囲よりもわずかに低い土地。流路の移動によって河川から切り離されて、その後に砂や泥などで埋められてできる。

河川の氾濫によって周囲よりも長期間浸水し、水はけが悪い。地盤が軟弱で、地震の際の揺れが大きくなりやすい。液状化のリスクが大きい。

一方で、人工地形の「高い盛土地」はこうだ。

周辺よりも約2m以上盛土した造成地。主に海水面などの水部に土砂を投入して陸地にしたり、谷のような凹地を埋め立てて造成した土地。

海や湖沼、河川を埋め立てた場所では、強い地震の際に液状化のリスクがある。山間部の谷を埋め立てた造成地では、大雨や地震により地盤崩壊のリスクがある。

まず、身の回りの確認を（国土地理院の呼びかけ）

国土地理院は「地形と自然災害は、密接な関係があります」として、身の回りの状況確認や、防災対策や宅地開発等の計画の策定、学校教育・防災教育などで活用してほしいと呼び

かけている。

あくまで「地形分類項目ごとの一般的なリスクを表示しており、個別の場所のリスクを示しているものではありません」としているが、事前に確認しておくことは、災害時への備えになるだろう。

「自然地形」「人工地形」の閲覧はこちらから。全国で使えるわけではないが、順次公開地域は広がっている。スマートフォンでも見ることができる。

https://maps.gsi.go.jp/#15/36.104682/140.086327/&base=std&ls=std%7Cexperimental_landformclassification1&disp=11&lcd=experimental_landformclassification1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0&d=v1

治水地形分類図の概要（国土地理院）

https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/fc_index.html

治水地形分類図は、治水対策を進めることを目的に、国が管理する河川の流域のうち主に平野部を対象として、扇状地、自然堤防、旧河道、後背湿地などの詳細な地形分類及び河川工作物等が盛り込まれた地図です。

治水地形分類図の初期整備図は、昭和 51 年度～昭和 53 年度にかけて作成されました（以下「初版」という。）。

また、一部図式の変更を行うなどし、平成 19 年度から更新図を作成中です（以下「更新版」という。）。

治水地形分類図は 2 万 5 千分 1 地形図と同じ図郭で作成しています。

治水地形分類図の、水系別の作成一覧表及び地方別・水系別の作成一覧図は以下のとおりです。

治水地形分類図一覧（更新版）

種類選択

更新版（旧流路なし） 更新版（旧流路あり） 初期整備版

地域選択

北海道 東北 関東 北陸 中部 近畿 中国 四国 九州

使いこなすには習熟が必要

私（伊藤）自身で国土地理院のサイトにアクセスしてみたが、使いこなすのは難しいと思った。習熟が必要だ。今後私も、防災まち歩きなどに使いたいと思うので、習熟していきたいと思う。